

鴻 koh

月刊俳句誌

令和5年12月1日発行
(毎月1回1日発行)
第18巻第12号 通巻210号

12_{月号}
2023



ひつそりと上げ潮どきの月見草

みそはぎの花のむらさき日の暮るる

楓の実の棘やはらかし房日和

付かず離れず一對の秋の蝶

山寺の床几に座して柿を剥く

梢先に乾いてゐたる鴉の贄

裏木戸に鳴くはちちろか邯鄲か

老齡の尼僧の眉の爽やかに

月齡は十三雁の列がゆく

詩ごころを大事に月を待ちみたり

唐黍を丸齧りして無為無策

野茨の下草に露人を恋ふ

網ほほづき思ひ詰めたる色にかな

房日和

主宰作品

増成栗人

引潮

副主宰作品

谷口摩耶

種を吐く力を溜めて鳳仙花

引潮の音遠ざかりゆく秋思

寺町の路地にたゆたふ金木屋

黄菊白菊活けられてゐる駅に着く

万葉の歌くちづさむ花野径

青空に銚めいてゐる榎櫃の実

鬼灯の色づく大門通りかな

ご近所の雨戸引く音秋深む

雨音が不意に小粒の早生みかん

秋深し紅茶に沈む角砂糖

現在休会中の「下総句会」の最寄り駅である「谷津駅」の、改札口付近に活花のショーウィンドウがあった。四季折々の花がいつも美しく活けられて、待ち合わせの人などの気を紛らわせてくれていた。今も続いていれば、秋は菊を中心に竜胆や芒、女郎花、萩などが活けられていることだろう。昔は大抵の駅に活花があった。近くに住む華道家に頼んでいたのだろう。日本ならではの癒しの空間だったような気がする。

中村世都

棉吹いて曲屋の軒深々と
誰がために色を変へゆく酔芙蓉
つくつく法師齒磨き粉絞りきる
栗ごはんフランス窓を雲の過ぐ
虫時雨手持無沙汰の湖の色
秋うらら樹海のやうに杜匂ふ

秋蚊湧くなり石棺に埴輪器に
水筒に水を立たせて花野行く
秋の蝶メタセコイアを越えて消ゆ
湿原を蛇行する川秋気澄む
雁来紅貨車長々と音もまた
秋灯ふゆる家路とも旅路とも
石段の真ん中踏み減りし良夜
秋はゆふぐれ波音波に帰りけり

「鴻」の歳時記（秋編）

抽出 谷口摩耶

秋 喪返しの虎屋の羊羹雲に秋 岩佐梢

新涼 杉下駄に新涼の風過りけり 赤峰ひろし

秋深し さつぽろの循環市電秋深む 飯川久子

月 月今宵ぞはぞは胸の痛くなる 西野桂子

秋湿 狛犬の吐息のやうな秋湿り 中村世都

薯蕷汁 大屋根と紅き橋見えとろろ汁 横井遥

秋の灯 蒔絵師の筆こまやかに秋ともし 山崎正子

孟蘭盆会 孟蘭盆会テープに残る母のこゑ 守屋吉郎

送り火 たまゆらの送り火を焚く灰明り 山内宏子

啄木鳥 林中を明るくしたるけらつつき 荒川心星

蛸 円墳を夕ひぐらしの包み込む 五十嵐敏子

赤蜻蛉 ゆふかぜのそのをりをりの赤とんぼ 吉田鴻司

螿はたはた 飛蝗とぶ光の粒となりてとぶ 半谷洋子

蓑虫 蓑虫のゆらゆら利休旧居跡 森多歩

「湯ヶ島・『温泉めぐり』の世界」鈴木 崇



改めて田山花袋とは誰か。花袋といえは自然主義文学の代表的作家として知られるが、代表作『蒲団』の有名なラストシーンの印象が悪いためか、今ではあまり読まない作家となっている。だが、随筆集『東京の三十年』は明治の社会や風俗を伝える興味深い一冊で、町歩きコラムの本欄としてはお勧めして知きたい。また、花袋は紀行作家の一面もあった。代表的な作品が温泉地を巡って書いた『温泉めぐり』である。花袋は旅の行程を美辞麗句抜きで書く。素朴と呼べば聞こえはいいが、「借しいことには、湯が少し温かった」など屈託なく記してしまう。自然主義というが、天然なところが花袋の文章の魅力だ。

温泉地を訪れたあとには、『温泉めぐり』を開いてみる。その地がどのように描かれているか確かめるのが、近年の旅行後の楽しみとなっている。湯ヶ島を旅し、関連する章を読んでいると、なんと私が泊まった旅館の向かいの「落合楼」に花袋は泊まっていた。

「夜、暗い廊下を通って、長い階段を下りて湯殿に行った時には、近所の人たちが、子供だの、婆さんだの、男女だのが、昼とはちがって大勢入りに来ているのを見た。蓬ろな髪、あれた唇、駁のきれた手などがそこにあつた。(中略)

『天城を越せや、むこうは春だ。もう梅は盛をすぎた？ 菜種も咲いたら？ 此処はなア、冬は寒いところだなア』

こんなことを婆さんたちは言った。「長々と引用してしまつたが、湯に入る人物のディテール、婆さん言葉、素朴な描写が最大の効果を上げている。花袋を読む醍醐味だ。

花袋のほかにも湯ヶ島にはゆかりの文学者が多い。

川端康成は「湯本館」に宿泊し「伊豆の踊子」を執筆した。梶井基次郎は療養のため「湯川屋」に滞り、川端の校正を手伝つた。井上靖は湯ヶ島で生まれ幼少期を過ごした。自伝的小説『しるばるば』に少年時代の思い出を書き



浄蓮の湯

残している。

浄蓮の滝はばたいて落ちにけり

遠藤若狭男

伊豆の名瀑・浄蓮の滝も見に行つた。

1万7000年前に噴火した火山から溶岩が本谷川に流れ込み、溶岩台地と浄蓮の滝が作られた。滝を作る崖には美しい柱状節理が見られる。溶岩が冷え固まつた時にできる規則的な柱状の割れ目がダイナミックだ。

滝つぼから下流500メートルほどのあいだは鱒釣場となっている。清流の最上流部には「天女魚」が生息する。体に朱点が散在する美しさから「清流の女王」と称され、釣りあこがれの的である。泊まつた宿にはアマゴの魚拓が掲げられていた。現認者には気のない宿の女将の名があつた。

羽音集

谷口摩耶 選



カリンバの弾く金音秋の声 豊橋 鈴木容子

道の辺の盗人萩の風の色

冬瓜汁とろみやさしきは味の

山に風足をくすぐる猫じやらし

ゆつたりと馬が首振り赤とんぼ

布袋葵うす紫の花三日

懸命に産み出す卵秋の蝶

すだちシロップ氷砂糖の溶けてゆく

葉脈を肥えし芋虫歩きをり

子に戻る母の衿持よ秋暑し

梨を食む祖母が隣にゐるやうな

桐一葉落ちて水面を揺らしけり

菊日和祖母に貫ひし文庫本

晴れ渡る空の映りて秋の水

石彫の手水鉢なり薄紅葉

八月や磯の匂ひの匂碑めぐり

人づてに聞きし仁右衛門島の秋

かなかなの鳴く頼朝の隠れ穴

一枚の落葉が雨の切株に

下総のみりんの里の秋の雲

名古屋 後藤美帆

平塚 草柳 忍

流山 江部 博

楽庵閑話

虫丸



俳句の要点として
内容の
単一化と
表現の
単純化をよく
言われます

短い俳句で
すべてを
述べようとすれば
まとめ
きれず
曖昧な



ものになって
伝える力が
弱くなる

単一化、単純化してこそ
短い俳句が
言葉の強さと
伝達力を
持ち得る

ただし
単純化した
措辞が本当に
強い伝達力を持つには



単純化に加えて
表現のオリ
ジナリティ
が備わって
はじめて
言葉では表せられない
言葉の奥の何かを
感じさせられ
る句となる
のだろうね

ナルホド!!



言葉では表せない
やましがダイレクトに
伝わる表現ね